

---

# 魔法少女リリカルなのは 鋼の力

SRX

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 鋼の力

### 【Nコード】

N8814Q

### 【作者名】

SRX

### 【あらすじ】

僕、神原千秋は電車事故で死んだ。でもそれは天界の過失で魔法少女リリカルなのはというアニメの世界にスパロボのバリアジャケットを備えたデバイスと共にいかせてくれるらしい……でもバリアジャケットって何？

## プロローグ（前書き）

初めまして、SRXです。

私は文章を書くのが初めてなので文法やら何やら色々と間違えてい  
ると思います。

それでもいいという人はご覧ください

## プロローグ

僕の名前は神原 千秋

普通の中学3年生。……のはずんだけど。

僕は何故か、いかにも神が住んでそうなその名の通り、神殿の中にいる。

下は地面でもなくコンクリートでもなく雲。そう雲、わたあめみたいな奴。

……雲の上って乗れたんだ。始めて知ったよ。

というか、何で僕はこんな所にいるんだろう？

記憶がちぐはぐだ……確か、学校からの帰りの電車に乗ったのまでは確かなんだけど

「何を呆けておるのじゃ？」

そして、僕の前にはダンブルドア校長のような立派な白ひげのお爺さんが黄金で出来た椅子にどっしりと座っている。

すごく、貫禄あるなあ……とりあえずこの人に聞いてみようかな

「あの、すみません。とりあえずここはどこですか？」

「ん？ ここは天界じゃ。お主達の世界での言葉を使うと天上や天国とかかの」

で、天上、天国！？ 何で、僕がそんなところに！？

僕は頭がこんがらがっていた。確か、天国ってあれだよな。し、死んだ人がいくところだよな。

うん、そうか。これは夢だ。

そう考えて自分の頬をつねる。

「ほら痛くない。やっぱり夢だ」

「お主のつねりかたが悪いのじゃ。これならどうじゃ？」

お爺さんが右手で何かをつまんで引つ張るような動作をする。すると

「痛!？」

僕の右頬に痛みが走った……

「どうじゃ？ 痛いじゃろ？ どうやら事態を把握できていないようじゃから言つぞ。お主は学校帰りの電車に乗っていたな？」

「は、はい」

「その電車は脱線事故を起こしたんじゃ。だが、奇跡的に死んだのは数人だけの。その中の一人がお前じゃ。要するにお主は死んだんじゃ」

……僕にはその言葉が信じられなかった。だが、それを裏付けるようにその時の記憶がフラッシュバックの様に鮮明に写る。

「そ、そんな……僕が……し、し……」

「死んだのじゃ」

僕が最も認めたくなくて言葉にできなかった単語をお爺さんは簡単に言った。

その言葉で僕は絶望に打ち伏せられた。

「ここからが本題じゃ。実はの、この脱線事故はわしら天界の責任なんじゃ。一人の天使が間違えて油を天下に落としてしまったの、それが線路についてしまつて脱線事故が起きてしまったのじゃ」

……油？ え？ じゃあ、僕は油に殺されたの？

ははは、油に殺された人間なんて珍しいだろうな……さよなら、蒼き日々よ、僕の人生よ

「そこでじゃー！」

「うわっ！？ は、はい、何でしょうか！？」

お爺さんがいきなり叫んだので僕はつい驚いて声を上げてしまった。

「お主を他の世界に転生させることにしたんじゃ。だが、元いた世界は無理なんでの。ならせめて夢のある世界に生かしてやろうと思つて、魔法のある世界の中からランダムで決めることにしたんじや。そしてこの世界に決まったんじや。アニメの世界じゃ、知つているかの？」

お爺さんがDVDのパッケージを見せる。  
そこに書いてあつたのは

「魔法少女リリカルなのわ？」

知らないです……リリカルが何なのか聞かれても分からないです。

「……今ので全てが分かったわい。お主、このアニメを知らないようじゃな」

「……はい、すみません」

「別に謝る必要はないぞ。だが、これじゃとデバイスとかの説明が難しくなるのぉ。やはり事前の情報が必要なのう」

デバイス？ 確か、和訳すると道具だよね。

「道具？」

「……もうこれについては実際に使うことで慣れてもらうしかないさそうじゃ。とりあえず、君にこれを渡そう」

お爺さんは左手を掲げ、そこから光を発し、その光は携帯の形を象った。

そして左手を振り下ろし、その携帯は僕の元へふわふわと飛んできた。

僕はおもわずそれを両手で包むように取る。

「それがこれからのお主をサポートしてくれる相棒じゃ」

《これからよろしくね》

近くから女の子の声が聞こえた。

「え？ 僕達以外に誰か、この近くにいるの？」

僕はあたりをきよろきよると見回すが、人影はない

「いやせんわい、それはその携帯が言ったんじゃ」

《そうだよ》

「あ、そうかよく考えたら携帯だから声が出るのも当然ですよね」

携帯はたたまれているけど……まあそれでも音は出るよね、うん

「いや、そういう意味ではないんじゃ。その携帯の電子頭脳が喋ったのじゃ」

……まあ最近は科学技術も進んでもんね。だから、そろそろこ  
ういうのが出てもおかしくはないんだよね、たぶん。

「ちなみにそのデバイスにはお主が好きなスーパーロボット対戦  
に出ている機体のバリアジャケットが入っておるぞ、しかも精神コ  
マンドも使える、どうじゃ？ うれしいじゃろ？」

す、スパロボ！？ 嬉しいです！僕はスパロボ大好きなんで！  
……でも

「すいません……バリアジャケットって何ですか？」

僕が率直に意見を述べると

「……これはもう実際に体験したほうが早そうじゃのう」

《……私もそう思うよ》

二人？ はあきれたように話し合った。  
……これも僕が悪いのかな……

「ちなみにその携帯は擬人化……要するに人になることも、そしてバリアジャケットをまとうて戦うことも出来るんじや。すごいじやろう……と言ってもお主には分からないじやろうがな」

「……はあ」

もう専門用語が多すぎて分からないよ……お年寄りがパソコンと分からないのもきつとこういふ感じなんだろうな。

「わしが出来るのはここまでじゃ、後のことは自分でな。では、頑張るんじやぞ」

パチン……！！

お爺さんが目の覚めるの様な音を両手で鳴らし、そこで僕の意識は途切れた。

## プロローグ（後書き）

S「前書きでも挨拶しましたが、始めまして、SRXです」

千「ち、千秋です」

S「ここまで読んでいただきありがとうございます。色々と至らないことが多いですが出来ればこれからもよろしく願います。やりしければ感想なども頂けると嬉しいです」

千「で、結局、僕はどうなるの？」

S「なのはA・Sの世界に行くんですよ」

千「エース？」

S「うん、それでいいです。ちなみに私ものはを最初、ツタヤで見たとき、なのわ？ って面白い？と聞いて、友人に笑われました」

「話 じゃはどい？」

「う、うん」

僕が目を開けると、薄暗かった。

周りを見渡すと上には天井があり、周りには壁があるから、どこかの部屋みたい……

窓があつたので覗くとビルがいくつも聳え立っていた。

どうやらここは市街地みたいだね。

《ようやくお目覚めみたいだね》

「え、誰？ どこにいるの？」

周りに人がいないはずなのに声がごく近くから聞こえてくる。

《ここだよ》

どうやら僕のズボンの右ポケットあたりで何かが動いているみたいだ。

右ポケットに手をつ込み、そこにあるものを取り出すと

《やあ、私はアネット、アネット・エーミスだよ。君の名前は？》

携帯があつた。それで僕はさっきまでのことを思い出した。

「あ、うん。僕は神原千秋です……」

《いい名前だね、これからよろしくね、千秋》

……名前を褒められるなんて始めてだなあ。

携帯が喋ってるのはもういいや……それよりも

「ここはどこなの？ どこかの都市みたいだけど人がいないし……」

《ごめんね、私も分からないんだ……この世界に何があるのかとかは全く教えられてないから。でもとりあえずここが魔法少女リリカルなのはの世界だってことは言えるよ》

魔法少女リリカルなのは？ なのわじゃないの？

……そういえば、なのわ？って言った時、呆れられたよね

「もしかしてあれってゝなのわ？ゝって読むんじゃじゃなくてゝなのはゝって読むの！？」

《そうだよ》

「そうなんだ……通りで君達があきれる筈だよね……読み方間違ってたんだから……」

まさか、アニメのタイトルすらまともに読めないなんて……

《そ、そんなに落ち込むことないよ！ 始めてならしかたないよ……！》

僕が落ち込んでいるとアネットが必死に慰めてくれようとしているみたい。

「ありがとう、慰めてくれて……でもいいんだ、そんなに気にしてないから……」

本当は気にしてないのは嘘で結構、へこんでるんだけど……折角、慰めてくれているのにいつまでも凹んでるのもよくないだろうから少し無理して笑ってみた。

《ならいいけど……》

雰囲気が暗くなってきたよ……話題を変えよう、うん、それがいいね

「話を戻すんだけど、一体ここはどこなんだろう？　ここ机とか全ての物が全体的にえらく高い部屋だけど市街地なのは確かみたいなんだけど」

《それは君が小さくなってるんだよ。とりあえずここから出て見たらどうか？》

え？　小さくなってる？

「どういうこと？」

《だから、君の身長が小学2年生くらいまで戻ってるんだよ》

「……本当？」

《私を開いてみて、そうしたら分かるから》

言われたとおりに携帯を開くと、本来画面がある場所に鏡があり、

そこには僕が小学2年くらいときの顔が写っていた……本当なんだ。

信じられないけど、鏡に映ってるんじゃないかな……  
とりあえずこれでもいいや。

それよりもこのままここにいてもしかたないかな……

「小さくなってるみたいだね……それよりもここから出てみるね」

僕が部屋から出ようとドアノブに手を掛けると

ドツカアアアアン!!!!!!!!!!

という轟音がすぐ後ろから響いた。

恐る恐る後ろを見てみると……土ぼこりでまともに見えづらいくどさつきまであった壁が粉々になっていて、部屋は見るも無残な状態に……何かが突っ込んできたみたいになっていた……まさかテロですか!?

「う、うつ」

すると粉々になった壁の向かい側の崩壊はしていないが凹んでいる壁の方からうめき声が聞こえてくる。

煙が少し晴れてきたみたいでよく目を凝らすと……コスプレをしている女の子が二人いた。

一方は全身も髪も真っ赤に揃え……確かゴスロリだっけ? まあそんな感じの服装の三つ編みをした女の子が立っている。もう一人は白を基調としたコスプレ服に、胸の辺りに可愛らしい赤いリボンをつけている栗色のツインテールの女の子が倒れていた。

赤の女の子は金槌の柄を長くしたゲートボールを打つときに使うやつ——スティックを持っていてそれをもう一人に突きつけていて、

もう片方の子はすぐくぼろぼろで壊れかけているが魔法少女とかが持っているような杖を今にも落としそうと言う状態だが何とか持ち上げている……すいません、これってどういう状況！？

……とりあえずかわらないほうがいいかな。警察と救急車を呼んでこよう。

僕はそう考えてなるべく音を立てずにドアノブを回し、この部屋を出ようとする

《ちょっと、君！！ その子に何したの！？ 怪我してるじゃない！！》

アネットがゴスロリ風の少女に噛み付くように叫んだ。

その叫びを聞いて、ゴスロリの女の子はこっちを向いてしまった。

……ばれない様に出ようと思ったのに。

だけど、こちらのことはあまり興味ないようで再び、茶髪の子へと向き直り、スティックを振り上げる。

言ってる事はよく分からないけど……助かった。

僕が胸をなで脅していると

《あなた、いい加減にしないで！！》

再び、アネットが止めようとする……せっかく見逃してくれたのに。

「ちょっと、アネット……何で、相手を怒らせるようなことばかり言うの！？ 折角、見逃してもらえそうだったのに！？」

《じゃあ、あなたは自分の安全のためにあの子を見捨てるんだね？》

アネットが少し、棘のある言い方で僕に聞いてくる。

「ち、違うよ、警察を呼ばうと思って」

「……もう面倒くさい。お前達もこの結界の中にいるってことは魔力を持ってるみたいだし。どうせこいつはここから動けねえ」

ゴスロリちゃんがこちらを見て、呟く。

「なら……お前から先に魔力を盗ってやる!!」

ゴスロリちゃんは僕をにらんで、スティックを構え、こちらに歩いてくる。

……うん。何で、小さい子がこんなに迫力あるんだろう？

……まあ、僕も今は小さいけど。とりあえず

「じ、ごめんなさいiiiiiiii!!!!」

ドアノブをひねって、部屋から出て、脱兎のごとくあの女の子から逃げ出した。

「話 じゃはどこ？（後書き）」

S「なのはの世界に突入！」

千「もう何が何だか……」

S「まあいきなりだからしかたない」

千「とりあえず逃げないと!!」

## 二話 鉄の城

僕はあの子から逃げるために必死に階段を下っていた。

《ちょっと、何で逃げるの！？》

アネットが僕に言い放つ。

「無理言わないでよ！ だってあつちは凶器を持ってるんだよ！  
？ ゲートボールのスティックみたいだけど鉄で出来てるんだから  
あれで頭でも殴られたら死んじゃうよ！？」

《それはそうだけど……》

僕らが走りながら喋っていると、一階を示す掲示板が見え、出口が見えた。

僕はそこに一目散に走り、外に出た。

……助かった。僕は立ち止まり、安堵の息を漏らそうとした瞬間

《危ない！》

僕の目と鼻の先に紅い光を帯びた鉄球が落ちてきて、それは道路に陥没した。

それを見て、背筋が寒くなる……恐る恐る、飛んできた方向を向くと、そこにはあのごスロリちゃんが空に浮いていた……

「な、何で人が宙に浮いているの！？」

僕は思いつきり叫んでしまった。

《叫んでる場合じゃないよ!》

「そ、そんなこと言われても!？　だ、だって人が飛んでるんだよ!？」

《今はそんなこ、千秋、上!？》

僕がとつさに上を見るとゴスロリちゃんがスティックを振りかぶって僕のすぐそばにいて、振り下ろす……

《念動フィールド!！》

「ッ!？」

スティックで叩かれた……と思った瞬間、僕を光で出来た壁が包んでおり、彼女が振り下ろしたスティックはその壁に阻まれて、火花を散らしていた。

だが、ゴスロリちゃんは諦めたのか空を飛んで少し距離をとったみたいだ。

念動フィールドってスパロボ？　って今はそんなことを考えている余裕がどこにあるんだよ、僕!！

《何とか防げた……でも、あっちがその気なら!!　千秋、反撃しよう!》

「む、無理言わないでよ!？　僕は空を飛べないし、武器もないし、何より怖いよ!？」

《じゃあ、逃げ切れるの？ あの子から？》

「それは……」

《それに大丈夫！ あと何回かは私がバリアを発生して、あなたを守るし、武器もあるし、空も飛べるから！！》

「バリアがあるのは分かったけど、どこに武器があるの！？ どうやって空を飛ぶの！？」

僕はかなり焦って聞く。今にも、再び、あの子が攻撃してきてもおかしくはないから。

《簡単だよ、SET UPって言って。そうすれば千秋は空も飛べるし、強力な武器も手に入れれる》

「本当？」

《こんな状況で嘘なんていうと思う？》

思わないよ……でもね、やっぱり信じられることと信じられないことがあるよ……

そう考えていると、あの子が指の間から手品のようにいきなり鉄球を出した。

あれに当たったら死んじゃうよね……エネットはあと何回かしか守れないって言うてるし、空を飛べる相手に逃げ切る自信も力もない……

「分かった、君を信じるよ……君の名前を言えばいいんだね？」

《その後にSET UP！　って叫んでね》

この間にゴスロリちゃんはこちらに向けてスティックで鉄球を打ち出した。

……バリア発生してくれるよね、ちゃんと？

「アネット・エーミス、SET UP？」

僕が叫んだ瞬間、光が僕を包んだ、でもその光はすぐに眩しくなくなり、何かが体に包まれる感覚がした。

すると鉄球が僕の元へ飛んできて、バリアが発生……しなかった。僕の足に鉄球は直撃した

「や、やられた……　ってあれ？　……痛くない」

鉄球は力なく、からんと音を立てて地面に落ちる。

僕が鉄球に当たった自分の体を見て見ると……無機質な黒い鉄だった。

「ええ！？　ど、どうなってるの！？」

《落ち着いて自分の体を見てごらんよ》

言われたとおりに見て見ると胴も腕もいや、全てが黒い鋼鉄のよくな物になっていた。

……これ、どこかで見たことあるような。

《ほらほら、反撃しようよ！》

「そんなこと言われてもあの子は空飛んでるし……」

《君も空を飛びたいと思えば飛べるよ》

……無理言わないでよ。でも空、飛べたらいいなあ。そしたら逃げ切れるかもしれないのに……

すると、僕のすぐ後ろから何かが出たのを感じた。

そして僕は一瞬で、あの子よりも高いところにいた。

「え？」

《ね、飛べたでしょう？》

周りのビルが小さく見えて、あの子よりも高いkし、落ちている感覚もない。

ってことは本当に飛べてるんだ……！

「本当だ……！ これで逃げれる……！」

僕が歓喜の声を上げると

《逃げるんじゃないで戦うの……！》

「でも怖いし……」

《大丈夫だよ、今のあなたはマジンガーZなんだから》

ま、マジンガーZ？ よく分からないんだけど……？

「どういこと？」

《そうだね……マジンガーZの代表的な技は？》

「え……ロケットパンチとか……ってうわぁ!？」

僕がロケットパンチと言った瞬間に右腕の肘から先がジェット噴射で飛んでいって、見えなくなった

「え、ええええええええ!?!?!?!」

《どう?》

「ぼ、僕の腕が……」

《戻って来いって念じれば戻ってくるよ》

「本当? 戻って来い。戻って来い、戻って来い……」

すると本当に鉄の右腕がジェット噴射で戻ってきて、僕の肘から先がなくなっていた右腕に引っ付きいた。まるで何もなかったかのように

僕はそれを呆氣にとられながら見ていた。

《どう? マジンガーZでしょ? あなたの見えない部分、例えば顔とかも全部、マジンガーZになってるよ。もちろんブレストフアイヤーとかも出せるからね》

「はぁ」

《まだ半信半疑みたいだね、じゃあ、あの子の反応を見て見たら

？  
》

僕が振り向くとゴスロリちゃんが近づいてきていた。  
そしてようやく互いに敵の細部までが見える距離に來たとき

「てめえは一体なんなんだ！？ いきなり機械みたいになりやが  
って！！」

《ね？ 機械みたいだつて》

「あはは…… 本当みたいだね」

これなら、多少は戦えるかも。 後は警察が来るのを待てば……

## 二話 鉄の城（後書き）

S「やはりスパロボとえば、マジンガーZ！  
というわけで最初  
はマジンガーZにしました」

千「タイトルも適当だね、鉄の城って……」

S「思いつかなかったんですよ……」

### 三話 超合金Zの固さはかなりの物

「覚悟しろよ、機械やろう!」

《Schwalb fliegen!》

謎の声と共にゴスロリちゃんはさっきよりも巨大な鉄球をどこからともなく出し、僕に向かって撃ってくる。

《受け止めて!!》

「うわぁ!？」

まっすぐに撃つて来たのでドッジボールの要領で何とか受けれた……避ける余裕がなかったからつい受け止めちゃったけどこんな大きい鉄球でも痛くないんだね。

僕が鉄球をまじまじと見つめていると

《何、ぼうつとしてるの!? 後ろ!!》

エネットに叫ばれて後ろを振り向くといつの間にかゴスロリちゃんがついて、スティックが形状を変えていて、先端部がドリルの様になってその反対方向からのジェット噴射に振り回されていた。

どういう状況? 僕が首をかしげていると

「ラケーテン、ハンマアア!」

スティックに振り回されて、高速回転しながら僕に接近してきた。もしかしくなくてもまづいよね、これ。僕はとっさに持っていた鉄

球を捨てて、

「に、逃げないと!!」

ここから離れようとするが

「くらえええ!!」

ガッン!!!

遅かったみたいで思いつき喰らってしまった。

でもそれは僕の腹部の装甲とぶつかり、火花を散らしているが装甲は特に凹んだりはしていない

それにあんまり痛くない……あれだけ強そうだったのに

「クツ、固てえ、でも……ぶち抜けええええ!!」

ゴスロリちゃんが叫ぶ。それに呼応したのか少し威力が強くなった気がした。

でも、やはり同じように火花を散らすだけだった。

「そんな……何でぶち抜けねえんだ!？」

《超合金Zの装甲は伊達じゃないよ!!》

「……エネット、僕はどうすればいいの?」

《もちろん反撃するの!! 今がチャンスだよ、ハブレストファイヤー!!》って叫んで!!》

「う、うん! ブレストファイ……」

技名を叫びきる前に僕はそれを中断した。

《どうしたの!?!》

「今、撃つたらこの子に当たっちゃうんじゃない……」

《この子は敵だよ!》

「……でも」

「クツ、こうなればギガントフォームで!!」

僕達が言い合ってる間にゴスロリちゃんが離れていく。

今まで、火花を上げていたところを見て見ると、傷一つない。

……超合金Zで固いね。でもあの子が言ってたギガントフォーム  
ってなんだろう?

考えていたらあの子は動きを止めた。

「本当なら使う気はなかったんだけど……しかたねえ!」

《何かするつもりみたいだね、でもさせないよ。千秋、今度はこ  
ちから仕掛けるよ》

「で、でも攻撃が当たったら怪我させちゃうんじゃない……」

《……怪我をさせたくないなら、怪我させたくないと思いながら  
攻撃すればいいよ。精神コマンドのふてかげんが掛かるから。少  
し甘い考えだと思っけどね……》

「本当？」

《うん》

そういえば、精神コマンドを使えるって言われたっけ。

「へてかげん」って確か、威力を下げるか、とどめをささないですむ力だったよね

なら、怪我させないで倒せるかも……

「分かった。怪我をさせずに気絶させるだけだよ……」  
「ロケットパンチ」――！

僕の右腕の肘から先がジェット噴射で飛んでいく。  
そして……あの子の頭上を通り過ぎていった。

《何で、外すの！？》

「ご、ごめん！ でも初めてだし……」

少し酷いと思うんだけど……始めてなんだからそこまで怒らなくても。

それにあの子もロケットパンチに驚いて、啞然としてるから。  
結果オーライだし

《当てようと思えば絶対に当たるはずだよ！！ 当てたいと思わなかったでしょ！！》

「そ、そんな無茶苦茶なこと、言わないでよ！？ 気持ちだけで何とかなる問題じゃないでしょ！？」

《あなたは気持ちで何とか「そこまでです」……誰？》

僕とエネットの会話を頭上からの声が遮った。

僕とあの子が上を見るとそこには……小学校とかで着るスクール水着の黒色みたいなのとマンとをつけた金髪でツインテールの女の子がいた……何で、スクール水着？

ゴスロリにスクール水着……この子達って服装が変わってるなあ。

「私は管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ。抵抗しなければ弁護の機会が君にはある。同意するなら武装の解除を」

ゴスロリちゃんを見て言った。

管理局？ 囑託魔導師？ 何それ？

全然、分からないけどとりあえず言えるのは……この子はいきなり襲っては来なかったということ。

とりあえず、ゴスロリちゃんよりは話は通じそうだね。

僕がゴスロリちゃんの方を向いていると、何かいかにもまずい！  
！ って感じの顔をしていた。

中が悪いのかなあ、とりあえず

「ごめんなさい……管理局とか囑託魔導師って何ですか？」

分からない単語を聞いて見ると

「え？」

金髪の子……フェイトちゃんだっけ、は少し間の抜けた声で返事をしてきた

「今だ！」

するとその瞬間にゴスロリちゃんの前に光で出来た球体が出た。

「！？ 何を！？」

金髪の子が叫ぶが

《E i s e n g e h e u l ! ! 》

ゴスロリちゃんは気にせずその球体を力いっぱいハンマーで叩いた。

すると突如もの凄い音と光が僕を襲った……何でか目も開けられし、五月蠅いだけで耳も痛くないけど、そこからゴスロリちゃんが逃げていくのが見えた。

……追いかけていいよね。

光と音が止むとフェイトちゃんは耳をふさいでいた手を下ろし、閉じていた目を開け、周囲を見渡し、あの子がいないことに気づく。

「しまった……逃げられた……」

すると僕がいるのに気づき

「君だね、なのはを助けてくれたのは」

なのは？ あ、もしかしてあの時、ゴスロリちゃんと一緒にいた子かな？

僕はあの子を助けてないよ……むしろ、見捨てよう……  
……かなり言いづらいよ

「いや、あの僕は……」

「全部、見ていたから分かってるよ。とりあえず、話を聞きたいから着いてきてくれないかな？」

……助けたんじゃないかってむしろ見捨てたんだけど……すごい勘違いされてる。

でも行くあてもないけど……

《付いていった方がいいんじゃないかな。ここにいてもしかたないよ》

「そうかな……じゃあ、そうするよ」

ということでは着いて行く事にした

### 三話 超合金Zの固さはかなりの物（後書き）

S「既に原作とは変わってるという」

千「原作が分からないんだけど……」

S「それは諦めて。ライ様、なっぺ様、感想ありがとうございます」

千「僕はこの後、どうなるの？」

S「大体、決まってるけど言っても分からないだろうから言わない」

千「酷いよ!？」

S「だって魔導師も分からないのに」

千「……」

#### 四話 あのお茶は何？

フェイトちゃんがビルに降りたのに僕も着いていくと、急に地面に魔方陣が浮かんだ。

そして一瞬で周りの景色がビル街からどこかの部屋の中になった

……

「ここはアースラ。管理局の船だよ」

「ど、どうなってるの!？」

フェイトちゃんが話すがそれを聞く余裕は今の僕にはない。  
ビルの上にいたはずなのに……

「どうなってるのって…… 転移魔法で移動したんだよ」

「転移魔法？」

僕が聞き返すと、フェイトちゃんは間の抜けたような顔になる……  
…何で？

「……もしかして転移魔法知らないのかな？」

「……うん」

「転移魔法はね、距離の制限はあるけど瞬間移動出来るんだ」

……そうなんだ。魔法って言うと筈で飛ぶのと願いを叶えるの二つしかイメージがないよ。

もしかして、僕の持っているイメージの魔法少女とは少し違うのかな。

そんなことを考えているといつの間にかフェイトちゃんの服装が変わっていた……これも魔法かな。

「君もバリアジャケットを解除していいよ」

「え〜っと……バリアジャケットって何？」

「……今、SET UPしてるよね」

SET UP？ そういえばさっき叫んだね……もしかして、マジンガーZのことを言ってるのかな。

SET UPで姿が変わるなら……

「SET DOWN？」

すると、僕の体が光に包まれた。

自分の体を見渡すと無機質な鉄ではなく元に戻っていた。

……何事も言ってる見る物だね

「こっちだよ、着いてきて」

僕が頭の中で色々と考えているとフェイトちゃんは歩き出した。僕もそれについていく。

少し歩き、大きなスクリーンがある部屋についた。

宇宙船艦ヤマトの第一艦橋に少し似ているような気がするよ……もしかしてここはブリッジみたいところかな？ 船って言うってたから

「艦長、戻りました」

フェイトちゃんが部屋の中央くらいに位置する椅子に座っている緑のポニーテールの女の人に話しかけた。

「フェイトさん、お疲れ様。それとあなたにも2つほど聞きたいことがあります。名前はなんていうのかしら？」

その人はフェイトちゃんにねぎらいの言葉をかけてこちらの方を向く。

「は、はい……神原 千秋です」

「千秋さんですね。私はリンディ・ハラウン。この船、アースラの艦長をしています」

艦長？ それにしてはずいぶん若い人だなあ。

あ、でもガンダム何てみんな若いね、そういえば。

「ありがとう、あなたが助けてくれなければなのはさんは今頃どうなっていたか……」

「あ、あの……僕は助けたんじゃないわよ」

「謙遜しなくてもいいわよ」

「い、いえ、あの」

「いいからいいから」

違うんですよ！ 謙遜してるんじゃないんですよ！！  
そんな僕の心の叫びは全く通じない。

「本当にありがとう。で今からは少し質問させてもらっわね。あなたは何であんなところにいたのかしら？」

何でって言われても……一度、死んで転生しました、なんて言えないよ……

それになんであの場所なのかは僕には分からないし……

「そ、それは……気がついたら何故かいました」

「気がついたら？ それ以前のことは覚えてない、記憶喪失ってことかしら？」

ハラオウンさんは更に聞いてくる。それ以前のことなんて知らないよ……と言うかいなかったから別に覚えてないでも間違っではないよね。

「はい」

するとハラオウンさんはため息をつく。

「そう……それでは後の二つも聞いても無駄ね……気になってたんだけど」

そう言って机においてあった湯のみを持って、飲もうとしたみたけど何かに気づいたみたいで中を見た。

「あら、なくなってるわ。エイミィさん、お茶のおかわりをお願い

「いできますか？」

「そう仰ると思ってもう用意してます」

茶髪のショートカットのお姉さんが急須を持ってきていた。たぶんあの人がエイミィさんだろう。

そして湯のみにお茶を注いだ。どうやら熱いお茶らしく湯気が立っている。

「艦長、砂糖はどれくらい入れますか？」

砂糖？ 何故にお茶に砂糖？

「3つでお願いね」

その言葉にエイミィさんは頷き、お茶に……角砂糖を3つ入れ、更にミルクを入れてスプーンでかき混ぜた……何ですか、それ？

もしかして抹茶？ いや、でも抹茶でもあんなに入れたら甘すぎるよね……

「……あの、それは？」

「え？ ああ、千秋さんも飲みたいのかしら？」

「い、いえ、違います！？」

僕は悲鳴に近い声で否定する。……あのお茶は少し飲みたくないかな。見ただけで体が甘ったるくなってきたよ……

「あなたは記憶喪失なのね。行くあては……あるわけないわね」

行く当て……どうしよう。全くない

「……はい」

「あなたみたいな年端もいかない子を放り出すわけにも行かないし……しかたないわね。どうしますか？ この船にいてもいいわよ」

「え？ でも……」

「遠慮しないでいいわよ。この船なら一人二人増えても問題はな  
いわ。……それにあなたの力に興味もあることだし」

最後の方はぼそぼそと言って聞こえなかった……

「すいません、何か言いましたか？」

「え？ ああ、気にしないでいいわ。で、どうするのかしら？」

……どうしよう。でも行くあてがないのは事実だし……僕が迷っ  
ていると

《いいんじゃないかな。正直、千秋が一人で暮らしていけるとは  
思わないし》

「……そうだね。……ハラオウンさん、お世話になります」

「分かりました。では千秋さんがアースラに居住することを許可  
します。それと私のことはリンディと読んでね」

「分かりました。リンディさん」

と言うことで僕はアースラで暮らすことになった。

千秋 SIDE OUT

リンディ SIDE

「じゃあ、エイミィさん、艦内を案内してあげて」

「はい！ 私はエイミィ・リミエッタだよ。よろしくね」

「よろしくお願いします」

千秋さんはエイミィさんに連れられてこの部屋を出て行った。  
私がアースラに彼女の居住を許可したのは人道的なことだけでは  
なく、彼女の力に目をつけたこともある。

なのはさんを倒した相手に対し、互角……なのかは分からないけ  
ど戦えていた。

あの子の協力を得ることが出来れば、戦力は必ず上がる。  
そうすればこの事件の解決もやりやすくなる。

……我ながら考えが黒いわね。

でも、事件解決には必要なことだからね。

さて、どうやって協力してもらおうかしら

あ、そういえばクロノに言っておかないと駄目かしらね……でも

あの子がこれを知ったらどうなるのかしら

#### 四話 あのお茶は何？（後書き）

S「ということでアースラの中に住むことになった千秋であつた。  
で、今の気持ちは？」

千「船酔いしないといいけど……」

S「それだけかよ……」

千「乗り物には強いけど……」

S「所で出す機体の説明つてしたほうがいいんですかね？」

千「何で？」

S「少し気になってね。マジンガーZは有名だから全員知ってるだろうけど他の機体だとそうはいかないと思ったので」

## 五話 鋼鉄の孤狼

「どう？ 艦内はこんな感じ。分からないこととあるかな？」

「いえ」

僕は現在、アースラのブリッジの部屋の前にいる。

エイミィさんに艦内を案内してもらったんだけど……この船、広いね……迷子になったらどうしよう。

色々はこの船の説明してもらったんだけどアースラって一応、軍艦みたいな物らしいよ。

やっぱりリンディさんがいたところがヤマトに似ていると思ったのは間違いじゃなかったみたい。

軍艦ならブリッジはある程度は似ていて当然だよな

「じゃあ、これからこの船が一時的に君の家みたいなものになるんだけど「エイミィ、話の途中で悪いんだが少しいいか？」あ、クロノ君。うん、別にいいよ」

エイミィさんの言葉をムコウから歩いてきた黒髪の男の子が止める。

誰？ 見たところ、軍服みたいな服を着てるけど

「君が神原 千秋か。僕はクロノ・ハラオウン」

「え？ ハラオウン？」

さっきのリンディさんもハラオウンだったよね、確か

「クロノ君はリンディさんの息子だよ」

そうなの？ そのわりに髪の色が違うなあ……お父さん似なのかな？

「そんなことはいい。それよりさっきの君の戦いを見せてもらった……あんな無防備な戦いではいくら丈夫でも他人の足を引っ張る可能性がある。それを僕が証明してやる。こちらに来てくれ」

そう言い残し、クロノ君は歩き出す……僕は別にもう戦う気はないんだけど……

「あ、あの僕は……」

「あちゃー……こうなるとクロすけは聞かないからなあ。千秋ちゃん、諦めて着いていつてあげて」

断ろうとするとエイミィさんからも言うてくれと頼まれる……これじゃ断れないよ

「……はい、分かりました」

「ごめんね、私もそろそろ行かないと」

そう言つて、エイミィさんはブリッジに入っていく。

……行くしかないみたいだね。僕は諦めてクロノ君に着いていくことにした。

何するんだろう？

で歩いているとクロノ君はある部屋に入った。確か、あそこは模擬戦室だったわけ

僕もそこに入った。すると中は壁だけしかない部屋だった……

「エイミィから聞いてると思うがここは模擬戦室。その名の通り、模擬戦をする場所だ。周りには結界も張ってあるから周囲への被害もない」

そう言いながらクロノ君は一枚のカードを取り出し、投げる。するとカードが機械で出来た長い杖へと変わった。

「どうしたんだ？ 早くSET UPしろ」

……SET UPってさっきやったやつだよね……

「SET UP」

すると光に包まれた。

「出来た……あ、この特徴的な武器は……マジンガーZじゃないよね」

僕の右手はリボルバーの先にステークが付いた様な感じになっていた……これはあれだよな。リボルビング・ステークだよな。そして両肩が妙に出っ張っている。

《やっぱり分かるよね。アルトアイゼンだよ、好きだよな？》

……確かに好きだよ、うん。でもね……操縦が半端なく難しいと

言われていて、しかも接近戦メインというか接近戦しか出来ないし、  
そこまで丈夫じゃない機体を何で選ぶの……

「ね、ねえ」

《何？》

「……何でアルトアイゼンなの？ 出来ればマジンガーとかの方  
が……」

《だってこの部屋を壊すわけにもいかないでしょ？》

……え、でもクロノ君が周囲への被害じゃないって言ってたよね？

《検証して見たけど結構簡単に壊れるよ。だからなるべく被害を  
出さないようにするためだよ》

「そ、そうなんだ」

《あ、スクエア・クレイモアだけは使わないでね。あれすると悲  
惨なことになるから》

確かスクエア・クレイモアって両肩から大量のベアリング弾を発  
射するけど離れて撃つと流れ弾が味方に当たる可能性が高いからっ  
て理由で接近してしか撃てない武器だよな。

「う、うん。気をつけるよ」

《それとこの機体を選んだのには他にもわけがあって……》

「そろそろ模擬戦を始めさせてもらう」

そう言ってクロノ君は杖の先端を僕の方へ向ける。

「行くぞ!!」

「Stinger Ray」

杖から電子的な音声が発せられて、杖の先端に光の球体が出来て、それを僕に撃ってきた

もちろん、避けられるはずもなく直撃したはず……なんだけど痛みはなくて、光が散乱したみたいで目がチカチカする程度。

《話の途中で入ってこないでよ……まあビームコートがあるから効かないけどね》

「あれってビームなの？」

《似たような物だよ、たぶん》

た、たぶんって少し不安だね……まあ防げてるみたいだからいいけど

《あの子の技はほぼビーム系の技。だからこちらが圧倒的に有利だよ！　ということとで恐れずに……突撃!!》

その言葉が聞こえた瞬間、後ろに付いているバーナーなどのブースターが点火したのが分かった。

あれ？　そういえばアルトアイゼンの加速力って……そう考えた瞬間、目の前にクロノ君がいた……

「うわっ!？」

僕はとっさのことで何とか体の向きを変えて、激突を避けた。  
そして何かを破って壁に思いっきり埋め込んでしまった……

《何で避けるの!？》

「……あの加速と人にぶつかったらどうなるのか考えてみてよ……」

《大丈夫だよ。あの子も防御を使えるし、バリアジャケットを纏ってるんだから》

「バリアジャケットって何？」

《……そういえば説明してなかったね。簡単に言うと身を守る頑丈な鎧だよ》

「じゃあ、クロノ君が着ているのは？」

《あれもそう。だから大丈夫》

じゃあ、これまでの子達もそうだったのかな？  
あのコスプレには意味があったんだね

「何てばか力だ……体当たりで結界を破るなんて」

僕が未だに壁にめり込みながら話していると後ろからクロノ君の  
声が聞こえる。

「……だが、今は隙だらけだ。いくら固くても至近距離でこれを耐えられるか!」

僕が壁にめり込まれているのから脱出すると、クロノ君はさつきよりも巨大な光の球体を創っていた……僕の目の前で

「Blaze Cannon」

その球体がさつきと同じように僕に向かって打ち出される。もちろん避けれるはずもなく、再び当たる。でも

《無駄無駄♪ そんな攻撃、いくら工夫しても効かないよ♪》

再び、光で目がくらまされてチカチカするがそれだけだった

「そ、そんな!？」

《千秋、ここからはこちらから攻撃するよ!》

「え、でも……《返事は!?!》は、はい!?!」

## 五話 鋼鉄の孤狼（後書き）

S「アルトアイゼンはロマン機体である」

千「使いづらいよね……」

S「ちなみにこの機体はロシア語で古い鉄です」

千「それが正式名称になってしまった機体だもんね」

S「ちなみにこの使いづらい機体が当初は量産を狙ってたという事実」

千「こんなの使える人はほばいないのにね」

S「では」

## 六話 自分の力

僕は目の前で啞然としているクロノ君を見る。

……人に危害を加えるのは好きじゃないんだけど……バリアがあるらしいし……いいのかな？

《何ぼうつとしてるの、千秋！ 早く！！》

そう考えているとアネットが叫ぶ。

しかし反応したのは僕ではなくクロノ君で、僕から空を飛んで離れていく。

《あゝあ……折角のチャンスだったのに……》

それを見て少しがっかりしたように呟いた……僕のせいかな……

「……」  
「ごめんなさい」

《え？ べ、別にこんなことで謝らなくていいよ。そのかわり次でかつこよく決めてね》

「う、うん、無理だと思うけどなるべくがんばるよ……」

僕がかつこよくなんて絶対無理に決まってるもん。

まず、まともに決めれるかも分からないし……

《返事が少し気に入らないけど……まあいいや。行くよ、千秋！》

「く、させるか！」

クロノ君を守るように魔方陣が発生する。

《防御なんて無駄だよ！ 千秋、リボルビング・ステーキだよ！》

それと同時に後ろのブーストが再び点火し、一瞬でクロノ君の創った……？ 魔方陣を体当たりでぶち破る。

……出来れば怪我しないで欲しいな。そう思いながら

「リ、リボルビング・ステーキ！」

僕は右手のリボルビングステーキをクロノ君に付きたてる、するとつさに杖でガードした。

でも僕は気にせずにリボルバーの中の炸薬を爆発させてステーキを打ち出した。

かなり鈍い音がし、そして僕の右手の力でクロノ君は吹き飛んで壁にめり込んだ

《どんな装甲だろうと……撃ち貫くのみ！》

アネットの決め台詞を無視して……クロノ君は大丈夫かな……と考えていると

《前見て！ 前！！》

一瞬、壁が見えたと思った瞬間、轟音を立てて壁にめり込んだ……

《……これじゃあ、どっちが勝ったのか分からないよ》

僕に飽きれて、アネットはため息をついた……だから無理だって

言ったのに。

そう思いながら壁から離れる。

そして気絶しているクロノ君のもとへ歩く。

すると、クロノ君は原型をとどめていないけどたぶん杖であった物を持ったまま、頭に血を流し壁にめり込んで気絶していた。

……さっきの鈍い音はこれだったんだね。一瞬の静寂そして

「ど、どうしよう!? 大変だ!」

《大丈夫だって。この子の怪我が治ってほしいの?》

「え? う、うん」

するとクロノ君の傷が光に包まれた。

そして光が消えるとそこには傷跡など全くなかった。

え? 何で? どうして!? ……もしかして

「今のも魔法なの!? どうやったの!」

《魔法じゃないよ。それにこれは千秋の力だよ》

え? 僕? ……何もしてないしまずこんなこと出来る訳ないよ。

「僕がこんなこと出来るわけじゃない」

《忘れたの? 千秋の力はスパロボの機体のバリアジャケット。  
そして精神コマンド》

アネットは精神コマンドを強調するように諭す。

……精神コマンド。そういえば精神コマンドに回復の能力もあつ

たよね。

「もしかして『信頼』か『友情』が発動したの？」

《正解！ それにさっきのリボルビング・ステーキのときも『てかげん』が発動してたしね。そうじゃなかったら壁になんか吹き飛ばされずにステーキで体を撃ち貫いてたし》

「え、あの……もしそんなことになっていたら……」

《少なくとも全治3年はかかる怪我……ううん、たぶん完治はしないかな》

僕は啞然とする。もし『てかげん』がなかったらと思うとぞつとするよ……

《ちなみに精神コマンドは千秋の望みや願望でほぼ自動的に発動するからね♪》

本当なのかな？ もし本当だったらすごいんだけどなあ

「ん……ここは……？」

するとクロノ君が目覚めたみたいで壁から離れて立ち上がり、僕たちの方を見てから原型をとどめていない杖を見た。

「……僕の負けだな」

《当然、当然♪》

「君達の力は本物のようだ。試すようなまねをしてすまなかった」

「い、いや……そんな……僕なんて」

「謙遜しなくていい。実際、君達は強い。管理局の人間ではない君達の力を借りるのは本意ではないが戦力が足りないのも事実だからね……これから宜しく頼む」

え？ 君達の力を借りる？ この部屋にいるのは僕たちだけだから僕らに行ってるんだよね

《力を借りるってどういうこと？》

「ん？ 母さ……リンディ提督から聞いていないのか？」

《何も》

「……まだ話してなかったのか？ じゃあ、もしかして僕が何で、君達と戦ったのかも……」

《知るわけじゃないじゃないじゃん。いきなり突っかかってきて》

「そうか……すまない。早とちりだ。実は今、僕たちはとある任務の途中なんだ。だが、その任務を成し遂げるには戦力がいる。でも今の力では足りるかどうかわからない。そこであの少女と互角に戦えていた君達に白羽の矢がたったわけだ」

《……ようするに私達を利用しようってこと？》

「そう思ってもらっても構わない。だが、この任務は失敗したり

間に合わなかったりすれば酷い大惨事を引き起こしてしまうんだ。もちろん人も大勢死ぬだろう。それを阻止するために力を貸してくれないか？」

クロノ君は僕らに頭を下げた。……大変みたいだけど痛いのは怖いし、僕は力になれるわけないし、むしろ足を引つ張ってしまいそう、いやほぼ確実に引つ張るだろうからいいほうがいいよね……

「でも、その、僕は役には立てそうにないか《いいよ》え！？  
アネット！？」

《大丈夫だよ、千秋は足を引つ張ることは絶対じゃない。私が保証する。だから、ね》

「……でも」

《大丈夫♪ 折角、力があるんだし人助けだと思おうよ。それにいざとなったら宇宙を崩壊させてでも千秋を守るから、ね》

宇宙を崩壊つて……あ、でもスパロボの機体の中には出来そうなのがあるから怖いな……

確かにスパロボの機体になれるなら力不足はないかも……もし、こんな僕でも多少でも役に立てるなら……手伝ってもいいのかな？

「……僕は手伝ってもいいのかな？」

「こちらから頼んでいるのに駄目なんていうわけがないだろう」

「……やれるだけ頑張って見るよ」



## 六話 自分の力（後書き）

S「雨季様、北洋様、サーベント様、感想ありがとうございます」

千「アルトアイゼンの説明です。」

アルトアイゼン・・・可能な限り遠くの敵機の懷に飛び込み、必殺の一撃を撃ち込んだ後、急速離脱する、というのをコンセプトに開発された試作機。そのため武装はほぼ全てが接近戦用の機体。一応、左手に機関砲があるがビーム兵器の類は全くなく、全て実弾兵器。名前のゆらいはドイツ語で古い鉄。

飛行能力はないが一応、ロケットのようにある程度まで上昇することとは出来る。

でもやはり空中戦は無理で遠距離に攻撃できないので遠距離中心の空中戦が得意なヴァイスリッターとのセットで運用が考えられていた

S「実際、スパロボでも接近戦は強い。だけど必殺技の切り札が移動後不可で1マスというクセの強い機体だからね」

千「でも使ったよね」

S「別に強いしかっこいいからねえ」

## 七話 まるでSFだね（前書き）

地震の被害にあった方のことを考えるとこんなことしていいのかなあと思ったりしましたが……結局、書いてしまいました。

## 七話 まるでSFだね

僕は今、アースラのブリッジでリンディさんにお茶を出していた。あれから数日。力を貸してくれといわれたけど特に何もなかった、もちろんその方がいいんだけどね。やっぱり平和が一番。

そう考えながらお茶に砂糖やミルクを入れてあの恐ろしく甘いリンディさん専用のお茶を作る。

そして僕はそれをリンディさんのところへ持っていく

「リンディさん、どうぞ」

そのお茶をリンディさんの机に置いた。

「あら、ありがとう」

そしてリンディさんはそのお茶を飲む。

いつも思っただけどよく飲めるよね……僕が以前、一口飲んでみたらあやうく吐きそうになったのに……

「でもリンディさん……こんなお茶ばかり飲んでいたら糖尿病になりますよ」

入れた僕が言うのも少しおかしいかもしれないけど実際、かなり酷い。

「そう？ でも炭酸とかにもかなりの量のお砂糖が入ってるわよ？」

「そうですけど……」

リンディさんの言葉に僕は口を噤んでしまった。

確かに炭酸もかなりのお砂糖が入ってるけど……

リンディさんの場合、飲む量の多さも問題だと思っただけだな……

お茶みたいに一日に何杯も飲むし…… あ、お茶みたいじゃなくて  
お茶なんだね。

僕がそう思っていると

「あ、そうそう。あと少ししたら本局に着くわよ」

リンディさんは何気なく言ったが僕には聞き覚えのない言葉なので

「本局？」

首を傾げる。するとリンディさんは

「この艦は本局……これは略名で時空管理局本局なんだけどね。  
整備とかのためにそこに向かっているんだけど……言ってなかった  
かしら？」

「はい……今、知りました」

この船、何でずっと止まらないのなっと思ってたけど……魔法が  
あるから補給とかが要らないと思って考えてなかったよ……でもや  
っぱし補給はあるんだ

《少し聞いてもいいですか？》

「何ですか？ アネットさん」

《この艦の情報とかを少し見せてもらったんですけどどう考えても最低で二ヶ月は整備が必要ですよ？ これまでの話を纏めると私達に協力して欲しいという事件は地球で起きている。でも行くのに時間がかかりここからだと言速な対応が出来ない。どうするんですか？》

「それについてはもう考えています。着いてから言うことに……  
ってもう着いたわね」

《そうですか》

この艦、使えないんだ。魔法で一瞬で直るってわけじゃないんだねとか考えていると。

リンディさんの着いたという言葉に反応して僕はスクリーンを見た。

するとそこにはガンダムとかで出てくるコロニー、ア・バオア・クーの様な建物だった。

「す、すごい……」

「ふふふ、今から上陸するわよ」

「ほ、本当ですか!？」

「ええ」

ガンダムとか見てて、コロニーって一度入って見たかったんだよね、楽しみだなあ」

僕はアースラが着陸するのがかなり待ち遠しかった。

「上陸後」

「……………」

本局に着陸してしばらく経って、アースラから降りた僕はその未來的な内部に驚愕し、言葉が出なかった。

「フフ、どう？　ここが本局。凄いでしょ。」

エイミイさんが尋ねてくる

「凄いとか言うレベルじゃないですよ！」

まるで漫画の世界だ……ってよく考えたら漫画だったね。

「フェイト、千秋、少しこっちに来てくれ」

僕が光景に圧倒されているとクロノ君が僕とフェイトを呼んだ。

「あ、うん」

僕はクロノ君のそばに行った。フェイトちゃんも

「なのはのことなんだが……怪我などはほとんどないし、千秋があの少女から守ったからリンカーコアも抜かれていない。ただレイジングハートのダメージが大きいから修理に時間がかかる」

その言葉に僕とフェイトは安堵の息を漏らす。が

「リンカーコアって何？」

「知らないのか……まあ君が部分的な記憶喪失とは聞いたが……」

「え？ あ、うん」

あ、そういえば僕は記憶喪失ということにしたんだっけ。魔法について何も知らないのにバリアジャケットを使えることが矛盾してるからって理由でアネットに言われてたんだった。

「リンカーコアとは魔導師の力の源なんだ」

「本来ならなくなることはないんだけど……それを奪っているのがあの時の少女達なんだ」

クロノ君の言葉を引き継ぐようにフェイトちゃんが言った。

「奪われるとどうなるの？」

「回復するまで魔法が使えなくなる。それに奪われるときに苦痛が伴う」

「そうなんだ……ありがとう」

「何、気にするな。で、ついでだから僕たちのデバイスも一緒に整備してもらうことになった。二人のデバイスを渡してく《悪いけど私は却下》何？ 千秋、何でだ？」

「え！？ いや、僕に聞かれても……」

いきなり話を振られて、困惑しながら答える。  
僕が言っただんじやないのになあ

《私には普通のデバイスを遥かに凌駕した自己修復機能があるから  
必要ないよ》

「そうなのか、千秋？」

「え……そうなの、アネット？」

《うん》

へえ、そうなんだ。じゃあ、要らないかな

「だが、万が一と言うことも」

確かに言われて見ればそうかも知れないなあ。

《ないから必要ない》

「そうか、ならいい」

クロノ君は半分諦めながら言い

「それとだ。フェイト、君は面会をしないとしないから一緒に  
来てくれ」

そう言って、フェイトちゃんとクロノ君は行ってしまった。

僕はどうすればいいんだろう。

周りを見渡すとエイミイさんが近くにいたので

「エイミイさん、僕はどこにいればいいんですか？」

「そのうち艦長がみんなを集めると思うからここらにいてれば私が呼びに行くからここらにいてくれる？」

「そうですか、わかりました」

僕がしばらく待っていると

「千秋ちゃん、こっちに来て」

エイミイさんに着いて行くとアースラに乗っていた人たちが揃っていた。

僕はエイミイさんに促されてその部屋のベンチに座った。

「さて、私達アースラスタッフは今回ロストログア——闇の書の搜索および魔導師襲撃事件の捜査を担当することになりました。ただ肝心のアースラがしばらく使えません」

そうなんだ……あの艦、好きなものになあ。アースラの整備がすぐに終わればいいのに……

「なので事件発生時の近隣に臨時作戦本部を置くことになります。分割は観測スタッフと捜査スタッフ、司令部にわけ「た、大変です！」「……どうしました？」

リンディさんの話に割り込むように他の部屋から女性が飛び込んできた。

走ってきたのか息を切らしている。

「そ、それが……ア、アースラが……」

「アースラが？」

「いきなり光に包まれて損傷などがなくなり、完全な状態になりました!!」

「何ですって!?!」

リンディさんが驚きの声を上げる。

他のスタッフやクロノ君たちもこの部屋にいた人はみんな驚いている。

「は、はい！ 見た目もデータ上でも完璧でロールアウト直後みたいです！ 何をしたんですか!?!」

「わ、私は何もしてないわ……」

《何でもいいけどとりあえずアースラは使えるようになったんじゃない?》

その言葉に部屋に入ってきた女性はその言葉にハツとして

「そ、その通りです！ 今、チェックも完璧だと念話が入りました。いつでもいけます」

「渡りに船とはこのことね……さっきまでの話は訂正します。アイースラスタッフはアイースラで再び地球へ戻ります。各自、乗り込む準備を！」

「……はい!!」「……」

そして会議が解散して皆さん、準備をするためか急いで部屋から出て行き、僕は一人残されてしまった。

魔法の力なのかな？ でもさっきの話を聞く限り、みんな予想外って感じだったよね……

「ねえ、アネット。何が起きてるの？」

《千秋がいきなりアイースラを直したからみんな驚いてるんだよ》

「僕がそんなこと出来るわけないって」

《精神コマンドは望みに対応して、ほぼ自動で発動するって言ったよね？ 千秋がアイースラが使えないのがいやで直って欲しいと願ったからね》

……そうだったね。でも艦まで直すなんて思わなかった。

でなんやかんやでアイースラで地球へ向かうことになった。

## 七話 まるでSFだね（後書き）

S「ライ様、サーペント様、感想ありがとうございます」

千「何か、都合がいいような……」

S「お前の力自体が都合のいい力だから」

千「そう……かな」

S「願いをかなえるっていつでも過言じゃないからなあ……まあア  
ー斯拉が最初からあったほうが書くの楽だし」

千「あはは……それが本音なんだ」

## 設定集

S「今回は設定集です」

千「設定集って……そんな物あったんだ」

S「まあ頭の中にはあった。…ぶっちゃけ、これは自分の頭の仲を整理するための物でもある」

A《こいつ、最悪だね……》

神原 千秋

身長 なのは達と同じくらい

容姿はダンクーガノヴァの館華 くらら。でも男なので胸はない。  
ここ重要。

CV 桑島 法子

心優しく、たとえ自分を襲ってくる相手であろうと怪我をさせたくないと思っている。

基本的に悪いほうへと考えていくネガティブ思考

能力

スパロボのバリアジャケットの展開・・・その名の通りである。  
ただし、実際の機体の性能をもちや同じ機体とっていいのかすら

分らないくらいに遙かに凌駕している。15段階フル改造+α  
と感じです。一部機体には能力の付属あり。マシンカイザーなら絶  
対に破壊されないという能力がつく。

あと大きさも機体によつては大きくなります。

願いをかなえる力(精神コマンド)・・・願ったことを起こす。

もしくは可能にする力。この能力は相手の無効化能力の影響下に入  
らない、よつてどんな能力でも無効や弱体化は出来ない。だが、あ  
くまで精神コマンドの力なので精神コマンドで叶えられない願いは  
叶わない。例えば敵が一瞬で消滅することを願つても無理。この能  
力はバリアジャケットを纏わなくても使える。

S「精神コマンドはスパロボでもチート?だからな。かならず相  
手を倒せるはずの技すらダメージを10に出来るし……信じられな  
いほどの力の差のある敵の攻撃を避けられるし。個人的に精神コマ  
ンドのコンセプトは自分より遙かに強い敵を倒すための力だと思つ  
てます」

千「でもスパロボだとくらつたらどう考えても一撃でやられる技  
もダメージに変換されるから耐えられるよね」

S「でもほぼノーダメは無理だろ」

デバイス

名前・・・アネット・エーミス

携帯型の超高性能デバイス。もはや修復ではなく再生というレベルでの自己修復機能、擬人化等、普通のデバイスとは一線を画している。

擬人化時の姿はひだまりスケッチの乃莉

CVも原田ひとみ

どんなときでも千秋の味方である。例え、この世の全てが敵になっても自分だけ味方になり、宇宙を破壊してでも千秋を守るというくらい千秋を大事にしている。

性格はさっぱりとしている。歯にもの着せぬ言動まではいかないが、言いたいことは千秋以外には言える。

擬人化時にスパロボのバリアジャケットを纏うことが出来る。ただし、精神コマンドは”ほぼ”使えない。（一部例外あり）

戦闘力はかなり高い。願いを叶える力（精神コマンド）がなければ同じ能力である千秋を赤子の手をひねるように倒せる。ただし精神コマンドを使われると逆に歯が立たなくなる。

S「今の所、こんなものですかね」

千「今の所ってどういうこと？」

S「そのうち、新キャラ出す予定あるし」

千「じゃあ、何で機体によって大きさが違うの？」

S「イデオンとGM、ガンバスターとザクとかが同じ大きさって  
おかしいじゃん」

千「そうだね……」

A《私の容姿の理由は？》

S「何となく、強いて言えば私がひだまりスケッチ好きだから」

千「て、適当だね」

S「何、気にすることはない。そんなことを言えばこの小説自体  
がご都合主義と適当で出来ているから」

千「……そうなの？」

S「アースラが一瞬で回復したし、それに今後どうするかあまり  
決まってるないし」

千「それって大丈夫なの!？」

S「かなり見切り発車だったからなあ」

千「……不安だなあ」

S「大丈夫だ、問題ない」

A《……大丈夫なのかなあ》

## 設定集（後書き）

S「ロボット様、サーベント様、感想ありがとうございます」

千「次回は本編なの？」

S「その予定」

## 八話 修理と破壊は紙一重

《何、この船！？ もろすぎでしょ！！ よくこんなぼろくさいのを戦艦って言ってるね！！ 信じられないよ！！》

アネットが叫んだ。

「ふざけたことを言っな！ このアースラは最新鋭の戦艦なんだぞー！！」

それに反論するようにクロノ君も叫ぶ。

《戦艦はね！ 戦う艦と書いて戦艦なの！ こんなもろいの戦艦じゃなくて船だよー！！》

……えつと、今、どうなってるのかほとんどの人は分からないと思うから説明するね。

～30分前 ブリッジ～

僕たちはアースラで地球へ向かっていました。

「アースラが使えるのは好都合なんだが……今更だが本当に大丈夫なのか、エイミィ？」

クロノ君がエイミィさんに質問した。

やっぱし、いきなり直った理由を知らないクロノ君からすれば不

安なんだろうな。

理由を知ってる僕でも本当に大丈夫なのかな？　って思ってるくらいだもんね……

「うん、ちゃんとチェックしたけど……不安ならもう一度確認する？」

「ああ、頼む」

エイミィさんはその言葉に頷き、コンソールを叩き始めた。

……僕も不安だし、アネットに聞いてみようかな……

「ねえ、アネット、本当にこの艦大丈夫なの？」

《あ、この戦艦が丈夫かどうか心配なんだね……ちょっと待って。今、ハッキングして調べるから》

アネットは僕の精神コマンドで本当に完全に直ってるのかを聞いたのを、この艦の丈夫かどうかを聞いたと勘違いしちゃったみたい……

「え、い、いやあのそうじゃなくて」

僕はアネットが勘違いしているよって言おうとしたけど

《遠慮しないでいいよ。もう終わったし……って何これ！？》

言い終えるまでに終わってしまっただけで迷惑かけちゃったなあって思っていると何の脈絡もなくアネットがいきなり叫んだ。

「ど、どうしたの!？」

僕はあせってアネットにたずねると

《何、このもろい装甲!？ しかも防御フィールドも貧弱じゃない! これのどこがディストーションフィールドよ!! 雷すら防げてないじゃない!》

「あれはただの雷じゃなかったんだ! それにディストーションシールドだ!!」

「何、その偽者!？」

「何が偽者だ!!」

アネットの非難にクロノ君が講義する。二人ともそんなにけんか腰にならなくても……

でなんやかんやと口論をして今に至ったわけなんだけど……

《何でもいいからとりあえず強化するからね!! こんな危険な”船”に千秋を乗せてられないよ》

「勝手にしろ!! 僕は知らないからな!!」

クロノ君はそう言い残しブリッジを出て行った……

「でもクロノ君の言うことに嘘はないよ、アネットちゃん。アースラは管理局の最新鋭の艦だよ。それに強化って言っても地球に向かってる最中だし今は無理じゃない?」

エイミイさんがアネットを少したしなめるように言う。

何で、今になって……なんて思う人もいるかも知れないけど  
本当のところ、アネットとクロノ君の口論が激しすぎて誰も口を  
挟めなかったんだ……

もし口を挟もうとしたら間違いなく飛び火していたから……

《普通ならそうだけど、大丈夫、問題ないから。ということで千秋！》

「え！？ な、何で僕？」

《いいから♪ いいから♪ 千秋だって拠点になる戦艦なら強い  
ほうがいいでしょ？》

「それはそうだけど……どうすればいいのかわからないし……」

《簡単だよ。千秋なら二機の獅子を使えば》

二機の獅子？ 獅子っていうとライオンだね。で強化ってことは……

「……もしかしてガンレオンを使うの？」

《うん。ちなみにもう一機はジェネシクガオガイガーだよ》

……えっと、何か限りなくこの艦が破壊されるとしか思えないんだけど！？

「この艦を壊すの！？」

《強化だつて！……別にジエー博士並みの魔改造をしてもいいけど……とりあえず壊すつもりなんてないよ》

「だってその二機つてガンレオンはザ・クラッシャーの機体だし……ジエネシクガオガイガーにいたつては破壊神だよね！？」

《ガンレオンは”一応”修理用マシンだし、破壊神はプログラム改変のために使っただよ》

……確かに使えるだろうけど……すごく不安だなあ。

「べ、別に無理して強化しなくてもいいよ……？」

《じゃあ、千秋はこんなもろい船に乗ってていいの？》

「え、それは……嫌だけど」

本当にもろいなら嫌だけど……破壊しそうで怖いんだけど。

《でしょ？　じゃあジエネシクガオガイガーにSET UPして！》

あ、もう決定事項にされたみたい……諦めよう。気が進まないけど

「……SET UP」

僕は光に包まれ、黒を基調として、胸に機械の獅子の顔をつけ、足にはドリル、そしてウイングを背につけ、後ろには髪を生やしている”破壊神”ジエネシクガオガイガーとなった。

《転送つと♪》

僕の足元に魔方阵が発生して、次に目を開けると、アースラが動いているのが見え、周りの景色が少し変だった。

「で、どうすればいいの？」

《アースラを殴りつけて!!》

「……やっぱり壊すつもりなんだね」

《違うって！ プログラムを変えるだけだって》

「……ならいいけど」

僕はアースラに近づき、言われたとおりに殴ろうと腕を引き、

《クラッシャーコネクト!!》

アネットが叫ぶと同時に思いっきり殴りつけた。

くそのころ アースラの内部く

「う、うわぁ、何だこのゆれは!?!」

「敵襲か!?!」

「そんな馬鹿な!?! 魔力反応も敵影反応もないぞ!?!」

く千秋ANDアネットく

……なるべく傷をつけないようにかなり軽く、ほとんど当てるだけのつもりでやったのに……5メートルくらい凹んじやった……どうしよう。

《ゴルディオン……クラ「ちょ、ちょっとアネット!？」何、千秋?》

「今、何しようとしてる?」

《え? ……………データ改変をしよう》

「ゴルディオンクラッシャーって言おうとしてなかった?」

《気のせいだって! アースラを變形させようなんて思ってないって》

「ならいいんだけど。で次はどうするの?」

《データ改変は終わったからガンレオンになって》

「うん」

くそのころ アースラ内部く

「大変だ！ 何者かがシステムをハッキングしてるぞ！？」

「何て、速さだ！ 人間業じゃないぞ！？」

「！？ 何かが送られてきました、このシグナルは……変形シグナルです！！」

「艦内重力が変形に対応していきます！？」

「どうなってるんだあああ！？」

僕はバリアジャケットを全身がオレンジ色をして、背丈を越すほどの巨大なスパナ——ジャイアント・ジャレンチを持った機体、ガンレオンをしている。

《じゃあ、改造開始！！》

その言葉とともに僕の体が勝手に動いた。

「え！？ 体が勝手に……」

《改造は私がやったほうが早いから私に任せて！！　まずはデッカースパナ！！》

スパナを取り出して、それをアースラに投げ付けた……

「ちょ、ちよつと！？」

《お次はブンマースパナ！！》

今度は二つのスパナを取り出し連結させ、ヌンチャクのようにアースラに叩き付けた……

クラッシュ・コネクトより遥かに大きくアースラの装甲が陥没した……

「修理だよね！？」

《修理と破壊は紙一重だよ！！　チェイン・デカッター！！》

両肩についたチェインソーでアースラの装甲を切り裂いていく……そしてほぼ全ての装甲を剥ぎ取ってしまった……

《とどめはライト・ジャレンチだああ！！》

「今、とどめって言ったよね！？」

ライト・ジャレンチでアースラを持ち上げて

《ビーター殺法！ マシン大圧殺！！》

下に叩きつける。するとアースラが爆発に包まれた……

「あ、アースラが……」

《よく見てよ、千秋》

「え？」

僕が恐る恐る、アースラを見るとそこには漆黒の黒の装甲を纏ったアースラが……

《超合金Zを装甲に張って見たよ。これで装甲は大丈夫でしょ》

「そ、そう」

僕はアースラが破壊されてなかったことにほっとしていた。

## 八話 修理と破壊は紙一重（後書き）

S「スパロボの破壊メカ二機での強化！」

千「あれは改造じゃなくて破壊だよ……」

S「あの二機を選んだ時点でああなるのは分かっていたことだ」

千「はあ」

S「デスティニープラン様、感想とプレゼントありがとうございます。プレゼントは出来るだけ本編で使わせてもらいますね。それでは」

## 九話 改造の代償は思ったよりもひどい

僕が艦内に転送されるとサイレンがなり、艦内は非常時の戦艦によくある赤く薄暗い光に照らされていた。

「プ、プログラムがあああ!？」

「何だ、この武装は!？ アルカンシエルが子供のおもちゃじゃないか!？」

「艦内姿勢、保てません!？」

「大変だ! 先ほどの衝撃でリンディ提督のお茶を顔から被ったクルーが!！」

「なんだと!？ 至急、担架を!! 早く!？」

……何か、すごいことになってるんだけど。

どう考えてもさっきの原因だね。

……どうしよう。

「!？ 大変です! アースラの周囲の空間が捻じ曲がって……何か、スクリーンに映ってる……え? ワープ?」

その瞬間、アースラは本来、いた位置から姿を消した。

僕が再び、目を開けるとみんな体がしんどそうだった。

「どうなったの!? 現状報告を!!」

体こそしんどそうだけど強い声でリンディさんが命令する。

「は、はい! 現在地は……地球の衛星軌道上です!」

エイミイさんが答える。その言葉でブリッジの中は騒然となった。  
……さっきのもしかして……

「アネット、さっき起きたのって……」

《装甲を改造したときについてに他の機能もつけたの。その中の一つ、その名もボソソジャンプ”改”!!》

「ボソソジャンプは確か、ワープだね……改って言うのは?」

《ボース粒子ではなくアースラのエネルギーで飛べるようにしたの。まあ、A級ジャンパーは必要だけどね》

「そうなんだ……」

僕たちが話し合っている間にブリッジは更にざわついて収集の着かないことになっていけたけど

「皆さん、静かに!!」

リンディさんの一言で辺りは静まり返った。

スピーカーからもリンディさんの声が聞こえてくるからたぶん艦内放送してるみたいだね

「不測の事態ではありますが、地球につけました。調べたところ、アースラが改造されているようですが目だった外傷などはなく、普通に航行することも可能だそうです。よってこれよりアースラは予定通りに闇の書事件についての捜査を「大変です!!」どうしました?」

アースラクルーの人がブリッジから飛び込んできて、リンディさんの話を止めるように叫んだ。

「先ほどの衝撃でクルー数名とクロノ執務官に民間協力者の高町なのはさん、ユーノ・スクライア君が負傷しました!!」

「何ですって!?! 怪我の具合は!?!」

「クロノ執務官は足を捻挫、高町なのはさんは腕が骨折、ユーノ・スクライア君は頭を強打し、意識不明。現在、戦闘可能な魔導師はフェイト・テストロッサ囑託魔導師に使い魔アルフ、ジトル執務官、確認が取れていないのが神原 千秋さんです」

「千秋さんならこのブリッジにいます。……でも戦力の大幅ダウンは否めないわね」

……まさか、こんなことになるなんて。たぶん最後のライト・ジャレンチが原因だったんだろうな……とりかえしのつかないことをしてしまった……

《リンディさん、戦力大幅ダウンじゃないですよ。千秋一人いれ

ばどんな相手でも負けませんから」

「……確かに千秋さんの力は分かっていますが……それでもやはり戦力がダウンしたことには変わりありません」

……僕のせいだ。僕がアネットを止めていれば。

《なら戦力がアップすればいいんですね？》

「……それに越したことはありませんが……何か宛でもあるのかしら？」

《もし万が一、戦力が足りないことになったら考えます》

「……そんな悠長な考えで「提督、そのデバイスの言うことも一理ありますよ」ジトル執務官……」

声のした方向を見ると壁に持たれて立っている金髪の男の人がいた。

「確かに戦力ダウンしたのは事実でしょうが、やってみなければわからないでしょう？ まずやってみてから考えればいいと思いますよ？ ほら、案外、案ずるより生むが易しって言うじゃないですか？ それに俺だってそこの魔導師よりは強いですよ？」

「……そうですね。ではそうしましょう。話を戻します。アースラは予定通り、闇の書事件の捜査を始めます……負傷したクルーの穴はみんなでカバーしましょう」

「「「「「了解！」「」「」「」」」」」

その言葉にクルーは敬礼をする。僕も釣られてする。  
でもあの人、誰だろ？ 一言でリンディさんを納得させてしまう  
なんて。

僕があの人の人を見ていると僕の視線に気づいたようでこっちに  
向かって歩き出した。

「何だ？ 俺の方をじろじろ見て？」

「ご、ごめんなさい！」

僕は急いで謝った。

「おいおい、何で謝るんだ？ 別に怒っちゃいねえって。……も  
しかして俺に惚れちまったとか？」

「え、え、え！？」

「ははは！ 冗談だよ！！」

僕が動揺していると男の人は僕の頭の上に手を置いて、なでてき  
た。

「俺はジトル・デュラン執務官だ。よろしくな」

「ぼ、僕は神原 千秋です！」

《私はアネット・エーミス。でもあなたやるね。私の言葉の真意  
を汲み取るなんてね》

「フツ、俺の考えはやっちゃったことやなっちゃったことはしよ  
うがねえ、後は野となれ、山となれええええ！！　むしろかきみだ  
せえええ！！　主義だからな。アネット、お前とは気が合いそうだ  
ぜー！！　しかし、初対面で気が合いそうな奴とあったのは初めてだ  
ぜ。デバイスなのは少し残念だが」

……　なんか、大雑把な考え方だなあ。

《流石に私はかき乱しはしないけどね》

「安心しろ、俺がかき乱すのは最悪のときだけだ。俺的には最悪  
の事態ならそれ以下はないんだからかき乱せば少しは上がるだろう  
って思ってるんでな」

《極論だね》

「ああ、俺もそう思うぜ」

《「ははは（ふふふ）」》

……　テンションが高すぎて話に入れないよ。

「まあ、これからよろしくな、千秋嬢にアネット嬢よ。ちなみに  
これからの戦闘の隊長は俺だから戦闘方面でもな」

《よろしく。ところで私達の戦闘データとかは要る？》

「データで見たところで実戦で見えないと分からないさ」

《面倒くさいだけの間違いじゃない？》

「そうとも言っな！ 後、俺は前歴は気にしない主義だから、暴れていいぜ」

…… 本当に大雑把な人だね。

「じゃあな」

ジトルさんは僕たちに後ろ手で手を振って離れていった。

「…… すごくテンションの高い人だね」

《私はあのノリ、嫌いじゃないけどね》

「あの人が隊長なんだね…… 大丈夫かなあ」

《大丈夫！ 千秋は無敵だし、いざとなったら私が守るから》

「…… ありがとう、アネット」

九話 改造の代償は思ったよりもひどい（後書き）

S「ということできなりオリキャラ登場です」

千「大雑把でテンションの高い人だなあ」

S「ちなみに怪我をしたのがなのは達である理由は」

千「理由は？」

S「人が多いと扱いきれる自信がないので三人減らすことにして、あとは……まあ察してください」

千「……適当だね」

S「理由はあるんだけど方っても仕方ないから」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8814q/>

---

魔法少女リリカルなのは 鋼の力

2011年4月14日21時29分発行